

屏風

屏風は和漢三方図絵に「屏風の名漢世から出ず」と書かれており、支那では漢代頃「約二千年前」屏風がつくられており、折屏風の制は唐代に至つて出来たといわれ、初めは王公が用いたものであらうか。

(故事成語に)

(王屏) 王座といわんが如し、展とは屏風なり、

文選卷の三の註に

展ハ屏風樹^{ツツル}之^ツ坐後^ニ也

とある。

わが国の屏風ももとはやはり支那から渡来したものと事物起源考にもみえている。

(日本書記)の四十代天武天皇の条に新羅よりの貢物に

(金銀、綾羅、金器、屏風、鞍皮、絹布、薬物之類各六十余种)

とあつて屏風を献じた記事が見えており支那から朝鮮に渡米しそれがついでわが国に移入されたものであらうか
「朱鳥元年四月」とあるので実に千二百七十年前の事である。

(日本画沿革史)によれば

東大寺献物帖「聖武天皇の御遺物を東大寺の慮舎那仏に献ぜられし目録」には十五種の屏風画あり

山水画屏風

大唐勒政楼前觀樂図屏風

古様宮殿画屏風

素画夜屏風

等とあり

(正倉院) によると

鳥毛とりけりうしよのびようぶ立女屏風

夾纈まきよけらのびようぶ屏風

萬縷まんろのびようぶ屏風

鳥毛篆書屏風

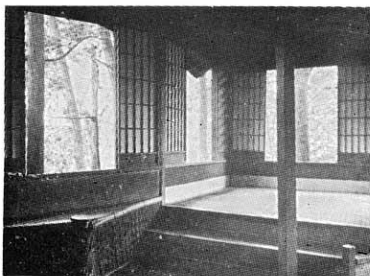
などはみな日本製とみられており、これらは四十五代聖武天皇の御遺物を、その冥福を祈るため、東大寺に献納されたもので千百年も昔の事であつて、奈良朝、平安朝頃には宮中を始め公卿たちも用いるようになり、時代を過ぐるにしたがつて一般階級にも普及した。こうして奈良朝時代すでに屏風貼りの刷毛のあつたであらうことが推定されるのである。

屏風に書かれるものも

(法隆寺御物)

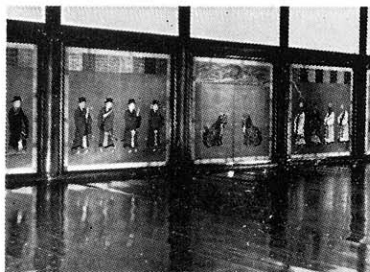
写経貼交屏風

のように信仰的なもの、神仏の像、人物画、肖像、等に限られていたものが後には信仰とはなれたものになつて

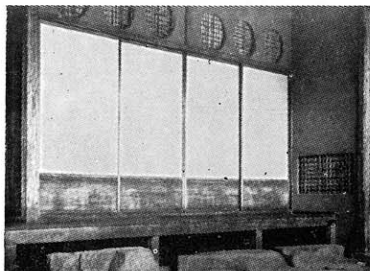


金閣寺夕佳亭

紫宸殿賢聖の障子



桂離宮・笑意軒正面

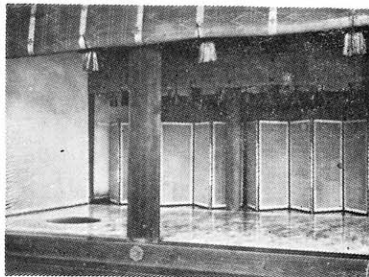


島原の角屋・青貝の間

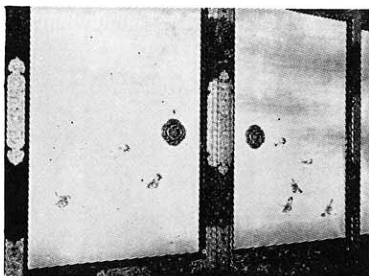


羊
(藤織屏風・正倉院)

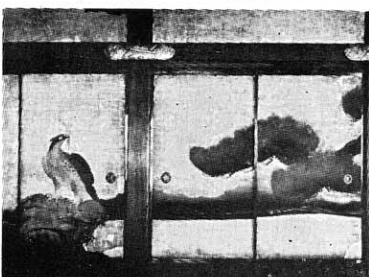
京都御所・清淳殿石灰書



東本願寺



二条城大広間の松鷹の図



来たといわれ（日本画沿革史）にある

屏風にものを画けば歌人之に題し障子に画く事あれば文人詩を讃せしなりとなつたものであらう。

（古今集）

千はやぶる神世もきかず竜田川

から紅に水くくるとは

なりひらの朝臣

（新古今集）

木綿ゆわただすき千年をかけてあしびきの

山藍の色はかはらざりけり

紀貫之

（拾遺和歌集）

あしまより見ゆるながらの橋柱

昔のあとの志るべなりけり

藤原清正

白雪はふりかくせども千世までに

竹の緑はかはらざりけり

貫之

これらは共に屏風絵を見て作つたものであるとつたえられておる。また当時の風俗を写すことも行われたので、これら古い時代に屏風に画き残されているものが、その時代の文化のありさまを知る資料の役を果しているのである。

屏風にはさまざまな種類があるが普通の形寸法としては

本間屏風 六枚立 丈 六 尺

利久屏風 二枚立 " 五 尺

四五屏風 六枚立 " 四尺五寸

枕 屏風 二枚立 " 二尺五寸

角立屏風 二枚立 " 五尺七寸

(風爐先) ふうろ先屏風 二枚立 寸法 各 種

などがあり、このほか四枚立や八枚立、十二枚立もあり

謡曲(咸陽宮)に

.....君聞けや君聞けや。七尺の屏風は躍らば越えつべし.....

とあるが寺院などには今も七尺の屏風や十尺の障子などもある。

これら屏風は主として室内装飾に用いられているが。

(書言故事)に

屏風は風をふせぐ具なり

とある如く実用として風を防ぐ場合や、さかさ屏風の風習もあり、座敷の間じきりにも使われる。

また遊廓のあつた頃、安い客は個室(本部屋)に入れず、広い室を屏風で囲つて寝かせ、これを割部屋と云つたが

(常盤津) 忍夜恋曲者(天保七年宝田寿時作) 将門に

・・・・・・屏風びど一重ひとえのそなたにはまだ睦言むじことの聞ゆれど・・・・・・

とあり

(端うた)には

・・・・・・屏風が恋のなかたちで・・・・・・

などなまめかしいものもある。

支那には(肉屏風)というものもあつたようで絵画にもみられるが

(書言故事)に

唐の揚国忠家富む、凡そ客ありて酒を設くるに、妓女をして各々其事を執らしむ、肉台盤にくたいばんと号す、冬月妓女をして之を囲ましむ。肉屏風と号す、肥大なる者を選びて、前に行列せしめて風を遮さへぎらしむ、之を肉障にくじょうといひ、また肉陣にくじんという。

とある。

古川柳に

秋風をふせぐ持参の金屏風

とあるがこれは屏風ではなく金の意であろうか。

後奈良天皇(百五代)時代屏風が海外へ輸出された。

彼のコロンブスがアメリカ大陸を発見したのは、西暦千四百九十二年で我国の明応元年に当り、応仁の乱が鎮定してから十五年後であるが、それより五十年後の天文十一年ポルトガル人ピントが種子島に漂着して始めて鉄

袍を伝えたが、これより後、彼等は我国に耶蘇教を伝えたのであるが宣教師は単に布教のみにあらず貿易という目的があつたので、その商船は屢々九州の諸港に來航して貿易を試み、袂時計、時辰儀、地球儀、織物などが輸入され、我国よりは、刀劍、蒔絵、屏風等が輸出されたのである。

南蠻屏風は西洋画の影響を受けた徳川初期の風俗画の屏風で画題は主として貿易に関係ある南蠻船やその風俗、キリスト宣教師の風俗などを描いたものである。

京都に屏風祭りがある。

七月十六日は京都随一の祇園祭の山鉾巡行の前日宵山（よいやま）で山鉾巡行よりもこの前夜祭をたのしむといわれるが、この夜、四条室町付近の家々はどの家も提灯をともし屏風を立てまわして、生け花、盆石などきれいに室内を飾る。しかも中庭から奥座敷まで見通され、きよらかな打水に石どうろうの灯が涼しくうつり、すだれのかげに美しく身しまいした人の姿が見えがくれする風情はなんともいえない。この屏風が先祖伝来の家宝で、名ある画人の作もあり、古美術価値あるものも少なくない。そこで屏風祭と言ひならわした。昔は決して奥まで見せない旧家まで、この夜だけは開放される。殊にあとの宵山（二十三日）に屏風をかざる家が多く、その屏風には名品が多くあつたのでそれを屏風まつりという傾もある。